第七章 バードフェザー事件

共和国暦七一九年八月四日。

「で、なんで、あたしがパパと一緒に行かなきゃならないの？」

「コーティリアは一六歳になる。」

「いきなり言われても困るよ、パパ。あたしにだって予定って言うのがあるんだから。仕事だったら、パパ一人で十分じゃない？」

「非難というには、やや乾いた調子のアルトの声。」

「おまえが一緒になければならんのだ。」

「家族を仕事に巻き込むなんて、軍人さんの風上にもおけない、なんて、前、言っただけだったっけ？」

「コーティ……」

困惑の響きを込めて、デュラン・バードフェザー少佐は娘の小柄な姿を見下ろす。相変わらず、黒い髪を無造作に背中の中程まで伸ばしたコーティリアは、どこか曖昧な微笑で父を見上げている。

「一日とは言わない、半日、つきあってくれと言っただけだ。これは重要なことなんだから。」

「文句言わずに付いてくればいい、なんて言うんだったら、あたしは行かない。それとも……」

「……？」

「共和国の命運を分けるような重大事件？」

「コーティは肩を竦める。ぎょっとしたような父の表情に、くっ

くつと喉の奥を鳴らして笑う。

「どこ、連れてく気なの？」

「それは後だ。すぐに分かる。」

「パパでなかったら絶対に信用できない台詞だよ、それって。レイヴェルゲンでだって、うっかり話を信用して付いていったら、あつという間に誘拐されちゃうって。」

「しようがないな……カレッジはどうなんだ。行けそっなのか？」

共和国でカレッジの受験資格の与えられる一六歳の時には学資が不足していた。

「パパのお酒が減った分と、サラリーが上がった分がプラス。首都なんかは越してきて、物入りが増えた分がマイナス。アルバイトがプラスアルファ……総合すると、かなりプラスになったと思うよ。」

ひょんなことから紹介された、ミュツケル議員のオフィスでのアルバイトは、ホバー・バイクのライセンスを生かしてのメツセンジャー・ガール。最近では、主席秘書のタッチアナについて秘書見習いのような仕事ももらうようになり、秘書初級の資格まで取ってしまったている。

コーティは咽喉声で微笑った。

「……娘の能力を過大に評価するのは、男親に共通の弊害だって、この間、なんかの本に書いてあったよ。」

不意に微笑を消し、まっすぐな視線で父を見据える。

身体は動かさなかったものの、デュランは気圧される自分に気づいていた。

「でも、行き先は教えてよ。お仕事の内容は聞かせてくれなくていいから。嫌いなんだよ、パパ。」

「うん？」

「理由も聞かされずに、他人ひとにいいように使われるのって。納得
ずくでバカを見るんなら、それはそれでしようがないけれど、騙
されて訳も分かんないで見捨てられるのだけはごめんなんだ」

ふ、と胸を突かれたような思いがしたらしく、デュランは娘の
顔を見直す。

悪戯のたねを探しているような、それでいて恐ろしく真剣な黒
い目がまっすぐに見上げてくる。

「政府高官の一人に書類を届けに行く」

「それってザモ……ザモルクとか言う人の指示？」

「それは言えない」

「連邦シエルズへ行ってきたことと関係あるの？」

「多少はあるかも知れない」

「変だよ、パパ」

気に入らない野犬を見つけた若い猫よろしく、コーティは濃い
眉をひそめる。

新しい“移住可能な惑星”の話は、コーティにとっても魅力的
でないといえば嘘だった。だからと言って、“援助”してくれた将
校団を無条件に信用する気には、少なくともコーティはならな
かったのだ。

「何が？」

「連邦母星シエルズ行つたのはお仕事じゃない？ あたしだって行き先は
知ってるくらいだから、ちゃんとしたお仕事だったんだよね。そ
れなのに、どうしてこっそり書類なんて届けに行かなきゃならな
いのさ？」

「軍務というのは、時々途方もなく変なことがある……一々、命
令の意図を勘ぐっていたら軍隊などというものは動くものじゃな
いんだ、コーティ。考えてごらん。宇宙軍だけで二〇〇〇万人以
上もいるんだ。その一人一人が命令の意味を疑って、一々裏をと
りに動いていたら、組織が成り立つと思っつか」

「本当にそう思ってるの？」
笑いを消した凝視。父の視線が僅かに動くのを確認して、デュ
ランも完全には彼の上官を信じ切っているのではないことを確認
する。

もう一度、冷笑に似た曖昧な微笑を浮かべ、コーティは頷く。
「いいよ、パパ。ぐーたらしてお酒ばかり飲んでるパパより、
真面目に仕事してるパパの方がずっといいもの。で、いつなの？」

それとはつきり分かる様子で安堵の色を浮かべたデュランは応
えた。明後日あさって……と。

「明後日？」

コーティは視線を巡らし、壁にぶら下がっている古ぼけた万年
カレンダーを視野に入れた。

「八月六日かあ……」

マーク艦隊中、最も編成の新しい第七艦隊を指揮するメル・
ヤンデキフィティが、ナキヤソ要塞の司令長官執務室に姿を見せ
たのは、共和国暦七一九年の六月一二日のことだった。

「第七艦隊もどうにか使いものになりそうになってきました」
執務室の前で行き違ったネイス・ミュッケルに、ヤンデキフィ
ティは堅苦しい敬礼を施した。敬礼下手の揃っているマーク艦

隊の艦隊指揮官の中で、ヤンデキフィティは例外的に鮮やかな敬礼をする。

「使わないのなら、それに越したことはありませんが……」

応えるミュツケルの表情はやや苦い。

「慣れない土地での生活……それも半年だけ、というのは疲れしました。しかも、駐在武官メルビン・シュレーダー提督として、ですからね」

マールクのいわゆる“政略偵察”要員として派遣されたのが、マールク艦隊の指揮官としては最も若く、最も顔を知られていないヤンデキフィティだった。無論、ヤンデキフィティだけではなく、何人かの人専門家が、彼をサポートするために同時に派遣されてもいた。

「だと思つたよ。とにかくご苦労さん。レポートももらった。まだ、半分しか読んでないけれどね」

紅茶のよい香りが執務室を満たしていた。

「カルシユ産ですね」

「半年も連邦にいと、鼻が利くようになるのかな。飲むかい？」

「頂きます」

交渉開始以来、僅かずつではあつたが連邦の産物、特に“カルシユ産”の天然食品が流れ込み始めている。連邦首都に派遣された、駐連邦ル・ラント外交団が、豊富に流通するカルシユ産の天然食品を買い求め、政産軍の要人に送りつけていることを、マールクは知っていた。なにしろ、外交行囊を運ぶ定期連絡船の護衛を、ヴィルワ恒星系外縁で引き継ぐのはマールク艦隊の任務である。マールクのもとにも紅茶やワインなどが時々、届けられるのだ。僅かな量を残して、マールクはそれらの処分を兵站監のオレー

グ大佐に任せてしまつているのだが。

「カルシユに関するレポートは特に興味深かつたよ、メル」

「実際、あれほどすさまじい弾圧をしているとは思いませんでした。大昔の……いわゆる帝国主義時代の植民地そのものです。あるいは……強大な全体主義国家の衛星国」

「紅茶といい、ワインといい……もう共和国じゃ、手に入らないような高級品ばかりだ……豊かな宙域、というか星々なんだろうね。そんなところがどうして、植民地同然の状態に置かれているのかな？」

「カルシユ……コーラル、という名前の恒星区、ええと、この恒星区というのは、連邦の地方行政単位を示すものらしいんですが……このコーラルは、連邦の大資本が完全に支配していて、連邦政府もなかなか手を出せないのだそうです」

「なるほどね」

「今までに九次にわたる暴動が起つて、すべて鎮圧されています。どのくらいの人間が逮捕されたかは公表されていませんが、逮捕者は連邦圏辺境の未開惑星に流刑になっているらしいんです。流星を視察させてくれ、と言つたら、さすがに断られました」

「そこまでは期待していなかった。で、どうかな。艦隊指揮官として、連邦空軍を敵に回したとして？」

「いけません」

ヤンデキフィティは紅茶のカップを置いた。

「シュネーゼルから連邦首都星まで、直線で九〇〇〇光年近くあります。確かに制式艦隊の兵力は、せいぜい一万四〇〇〇ですが、後方攪乱なら中古の警備艦艇でも十分でしょう。それに、連邦の工業力……」

連邦空軍による二〇万隻にもおよぶ艦隊の大拡張計画は、さすがのマークをも呆れさせると同時に戦慄させた。共和国政府は、“戦いとは、数であるものではない”とのんきな主張を繰り返している。その例として、マークが三倍のドレド艦隊を壊滅させた“ドライバオム宙域会戦”がかならず引用されるのを、マーク自身は苦々しい思いでいるのだ。

「一万対一万二〇〇〇なら、一万二〇〇〇が必ず勝つという保証はない。しかし、一万対三万なら、一〇中八、九、三万隻の方が勝つだろうし、一万対一〇万なら、一万隻しかない側の勝ち目はゼロと等しい。ドライバオムは例外中の例外だ。もう一度やれと言われたってできるもんじゃないよ」

「普通、艦隊拡張計画は極秘でしょう？ それを敢えて公表したというのは？」

「脅しだよ。大げさに腕を振り上げて見せているんだ……」

「なるほど……ただ、連邦も隙がないわけではありませんね」

「……ん？」

「たとえば、カルシュであるとか……」

「なんとも言えないね」

連邦圏の地理、生活状況、政府のシステムなどを報告し終えてから、ヤンデキフィティは立ち上がった。

共和国暦七一年の末から七一九年の前半にかけて、マーク艦隊は活動のほとんどを停止し、マーク自身もドライバオムからナキヤソの要塞に戻ったまま動いていない。マークにしてみれば、このまま退役して別な人生を選択したかったのだが、フェレラ首相が彼の辞表を受理する可能性はゼロに等しかった。

マークと、彼の幕僚が活動を全く停止していなかった証拠に

は、この時期にマークは、求められて対連邦戦略に関する意見書を提出している。原本が失われたために、正確な内容は伝わっていないにしても、ミュッケル姉弟、ファートウリック・ラング、メル・ヤンデキフィティらが個別に書き遺した手記から、そのおおよその内容を再現することができる。すなわち……

……

ル・ラント共和国宇宙軍艦隊最高司令長官として、シエルメス連邦との開戦は、軍事的に不可であるのみならず、政治的にも最も愚劣な選択であると結論する。これは、軍事的に連邦に対する勝利が、完全な不可能と同値であるばかりか、連邦との戦争が共和国にとって破滅に他ならないと考えるがゆえの結論である。

最初に行わなければならないのは、シエルメス連邦との全面戦争の必然性の有無に関する議論である。国家として最大の愚行がありえるとして、それは無名の師（無名目な戦争）である。そして、後世と同時代に向けていかに弁解を行ったところで、侵略戦争は、所詮無名の師であることを免れない。

中世から近世に移った時代以降、侵略戦争が最終的に成功したためにはない。これは、侵略される側の抵抗の増大が、戦線を拡大すればする程に侵略する側の戦力を削ぎ落とすためである。侵略行為に伴う無計画性が補給の欠乏を招き、占領地における掠奪行為を引き起こすという一面も無視し得ない。致命的なのは、侵略戦争の無名目さが引き起こす、侵略者側兵士、すなわち市民の道義的退廃である。

戦争行為は、ミク口な視点で見れば、個々の兵士による殺傷行為の集積である。他人への殺傷行為は、人間の持つ本質的な道義

に背反する。戦場において、兵士をして殺傷行為を正当たらしめるものがあるとすれば、それは個々の兵士の生存本能である。同時に、彼らが本能的に持つている国家組織への忠誠心であるとも言える。ところが、侵略戦争に見られる戦争の非道性は、参加する兵士に国家の正当性への疑問を抜きがたく植え付けることになる。この場合、兵士を殺人のための兵器と化せしめるのは、もはや彼らの生存本能でしかない。このような生存のための本能は、兵士たちが日常の生活に復帰した場合にも、殺人や、それに類する犯罪への禁忌を極端に緩めてしまう結果となる。そして、一旦進行し始めた市民の道義的な退廃は、その後数十年にわたって社会に重大な問題をもたらすことを、共和国の歴史のみならず、現在、共和国母星社会で深刻化しつつある犯罪の増加が教えてくれている。

シエルメス連邦に対する開戦名目が、シユネーゼルの奪取による新天地の開拓であるとの主張は首肯できるものではない。連邦をして、その勢力圏の一部を割譲させる。この意味での戦争が、全くの無法な侵略戦争であるとは断定できない。二つの条件が成立するかぎりにおいて、という意味である。連邦が頑なにシユネーゼルの割譲を拒否し、かつ我々が外宇宙へ出るための航路を封鎖する。さらに、シユネーゼルを前進基地と化した上で、共和国圏内への侵攻を意図していることが明らかとなつたならば、である。現在のところ、連邦は共和国に対して好意的であり、シユネーゼルの割譲に関しても交渉の余地ありとの立場を表明している。つまり、上記の条件は、どのように連邦に否定的な見方をもつても成立し得ない。シユネーゼルの購入は、短期的には極めて高価につくことは間違いない。しかし、少なくとも共和国に対

する明白な悪意を持たない巨大国家への侵略戦争は、おそらくシユネーゼル数個を買収するに足りる戦費を費やし、悪意を以て好意に報いられたことによる憎悪を招くだけに終わるであらう。

シエルメス連邦を敵とした戦争が長期化した場合、共和国が勝利を得る確率はまったくくない。共和国暦七二〇年代初頭における、艦隊兵力を指標とした両国軍事力の比率は、連邦空軍を一（艦艇約一万四〇〇〇）とすれば共和国宇宙軍は二・五（艦艇約三万五〇〇〇）となる。この数字は開戦初期の共和国宇宙軍の戦術的な優勢を保証するが、戦略的な優勢をも意味するものではないことを銘記する必要がある。

共和国宇宙軍が現在確保している戦術的優勢を、戦争の勝利に直結させる手段があるとすれば、それはただ一回の会戦で連邦空軍の艦隊兵力を壊滅させることである。ただし、艦隊の壊滅が、連邦と連邦空軍に対して決定的な意思の変更を促すという条件が前提となる。

しかしながら、このような戦略は、以下に列挙する理由によって現実性を持たない。第一には、連邦空軍艦隊をただ一度の会戦で殲滅させ得る保証がない。一〇〇〇光年足らずの奥行きしかもたない共和国圏に比較して、シエルメス連邦圏は一万光年を超える縦深を持つ。ただ一度の会戦で連邦空軍艦隊を全滅させ得なかつた場合、我が艦隊にはこの縦深を突破して連邦圏の中核を直撃する余力を持たない。つまり、第一回目の会戦に失敗した共和国宇宙軍には、代替すべき戦略目標がない。しかも、連邦圏への侵攻路となる“ル・ラント回廊宇宙域”の存在は、すでに連邦空軍の知るところとなつている。連邦圏への侵攻路に対して、共和国宇宙軍艦隊は最小の選択肢しか与えられない。反して、連邦空軍

は共和国宇宙軍艦隊の進路に最大の抵抗線を築くことが可能となる。わたし自身が連邦空軍の戦略を担当していたと仮定すれば、シュネーゼルを初めとして、共和国宇宙軍艦隊の想定進路上の有人惑星に抵抗陣地を構築する。侵攻する側は、逐次に強力な抵抗を受け、少なからぬ戦力を失い、遂には連邦圏中枢を直撃する意思と能力を喪失するに至る。

第二の理由は、連邦空軍艦隊の殲滅が、必ずしも戦争の終結に直結しない可能性である。この可能性は、“ドレド戦役”における“ドライバオム回廊宙域会戦”を思い浮べるだけで、きわめて蓋然性の高いものであることが理解されるだろう。“ドライバオム回廊宙域会戦”でのドレド主力艦隊の全滅は、その後三年以上にわたるドレドの抵抗を導いただけだった。ドレドに比して著しく優勢な国力と潜在的な軍事力を保有する（と推定される）シエルムス連邦が、ただ一度の惨敗に狼狽して、一切の軍事的な抵抗を放棄すると予測するのは余りに樂觀的と言っしかない。仮にウィルフ恒星系の占領に成功したとしても、連邦空軍には、なお広大な連邦圏を武器として使う余裕がある。

開戦劈頭、全戦力を挙げた艦隊決戦で連邦空軍艦隊に重大な打撃を与えたあと、少数の機動部隊で連邦圏の中枢を電撃的に突破する戦術は、共和国宇宙軍艦隊の弱点を効果的に補強する最善の策のように聞こえるかもしれない。しかし、これも以下の理由により実行は不可能であるか、若しくはきわめて困難である。

既に述べたように連邦空軍艦隊に決定的な打撃を与えられる保証がない。艦隊の兵数は共和国宇宙軍に有利である。数的な優勢は、戦術的な勝利の確率を著しく高めるものである。しかし、必ずしも会戦の勝利に直結しているわけではない。また、会戦に勝

利をおさめたとしても、連邦空軍艦隊の半数を取り逃がせば、機動部隊の侵攻にとつて手強すぎる抵抗戦力となり得る。大兵力の機動部隊を動員し得ない以上、制式一個艦隊以上の残存兵力はそのまま戦争の長期化を意味するものである。

連邦圏中枢を直撃するためには、最小限度三個制式艦隊を動員する必要がある。連邦圏の有人惑星に配置されていると推定される警備艦隊を制圧し、効果的に連邦圏深部に侵入するための最小兵力である。ところが、三個制式艦隊が艦艇一万隻以上、兵員一二〇万から一五〇万人から構成されている事実が注目されなければならぬ。連邦圏の中枢部に達するまでの所要日数は約六〇日。戦闘が全く行われないうちでも、一個艦隊の消費する物資の量は約六〇〇万トン。一方、一會戦単位に消費される物資の量も六〇〇万トンに達する。これらの物資を集積し、前線に送り込むだけの兵站機能を、共和国宇宙軍は所有していない。

現地における徴発が不可であることは論をまたない。連邦市民にとつて、共和国宇宙軍艦隊は侵略者にほかならない。侵略者に対するパルチザンの発生は、歴史的に見ても必然であり、パルチザンの存在が軍隊の補給路にとつては致命的であることも無論のことである。

万一にも、以上のような困難を排して連邦中枢を直撃し、連邦の戦意を破壊できたとしても、連邦に全面降伏を要求し、受諾させることはできない。共和国宇宙軍には戦線を維持する能力がない。遠征部隊は短時間で引き揚げざるを得ないだろう。そのような敵に対して、連邦が全面降伏を受け入れるわけがないのだ。しかも、一度、奇襲攻撃に失敗すれば、共和国宇宙軍には再度の攻撃を行う余力がない。

以上の理由により、シエルメス連邦との開戦は、ル・ヤント共和国にとって最悪の選択であると結論する。共和国政府の賢明な判断を願うや切である。

……

“もし、ル・ヤント軍の戦略指導者に連邦圏中枢への電撃作戦実施の意思があるならば、ル・ヤント回廊宙域を経由しての反復攻撃が最悪の選択であることを知るだろう。ル・ヤント共和国宇宙軍が、連邦圏へ侵寇作戦を行うとして……”
全く同じ頃、レーフラム・トゥリユー・ネレイド少佐は指摘している。

“彼らの侵入路は、いわゆるル・ヤント回廊宙域のみに限定される。これは、同時に、ル・ヤント軍の、戦略上の選択肢を著しく狭める制約である。連邦空軍は、ル・ヤント回廊宙域の出口から半径二、三〇〇光年の宙域にわたって縦深陣を敷き、侵襲してくるル・ヤント軍艦隊に対して戦略的持久戦闘を展開しさえすればよい。

連邦空軍にとって戦略的持久は、最上の戦略である。ただし、ル・ヤント軍の戦略指導者が十分に連邦圏の政治的・経済的情勢に詳しいならば、幾つかの選択が可能である。その一なるものは……”

「……まあ、策はあることはある。連邦空軍必勝の戦略を破る手段はね……」

マールクが語った内容を詳しく日記に記したのは、アリシア・ミュッケルである。レーフラムの意見書も、アリシアの日記も確度の高い歴史的資料として遺され、両国に期せずして現れた優れた

た戦略家二人が、同じ結論に達していたことを証拠だてることになる。

「マールク元帥が戦争を好まなかったのは本当のこと。しかし、マールクという人は、確かに軍事的な天才としての一面を合わせ持っていた。軍事的な天才を働かせる余地を発見したとき、彼は、自分が戦争を嫌っている事実をさえ、一時的に忘れ去ってしまうように見えた……」

“分かっているが、政府には具申しない”……マールクは、アリシアにそう語っている。“万に一つでも樂觀的な見通しを語ったら、共和国政府は、それをあてにして戦いを始めようとするだろうから……戦争なんか、ないにこしたことはないんだ”

参謀本部第五部局の諜報員として派遣されていたデュラン・バードフェザーも、メル・ヤンデキフィティと相前後して連邦首都星から戻ってきている。

「大変によくやってくれた。きみのレポートはさつそく、より詳細なレポートにまわしている」

第五部局長のユーリィ・ザモフ少将自らがデュランを迎え、ねぎらった。

「は、書記官という立場でしたから、連邦の外交筋とも比較的、容易に接触できました。無論、連邦も無防備ではありませんでした」

連邦も国防情報局という強力な組織を持ち、防牒には万全を期しているらしい、とデュランは連邦母星での経験を披露する。もともと、デュランの任務は、ル・ヤント側の駐在武官の監視だった

から、連邦空軍の国防情報局もさして彼をマークするということはなかつたらしいが。

ザモフは部下のペトロフを呼んだ。大至急、「バードフェザー・レポート」の複製を作成すること、ピセンテ・フェレラ首相とデスタリヴァ・ドロク参謀総長のスケジュールを確認することを命じる。

「何を……なさるのですか？」

理解に苦しむ、という表情で問い返すペトロフに、

「きみが知る必要はないことだ」

「は、了解いたしました」

「……それと、従兵にコーヒを持ってこさせろ」

「は、閣下」

ぱちんと軍靴の踵を打ち合わせ、ペトロフは退出する。ペトロフ同様、理解に困難を覚えた表情のデュランに、ザモフは切りだした。

「ペトロフを信じていないわけではないのだ。しかし、知らなければ、彼が情報を洩らすということもないからな」

「情報？」

「フェレラ首相にきみのレポートを直接、手渡したいのだ。前にも言ったとおり、我々はマールクを信用していないが、同時に参謀本部の首脳はもつと信用していない。マールクの持つ軍事力は、共和国にとってきわめて危険だ。政府に冷遇されているマールクが、共和国を裏切つて連邦と結ぶ可能性は決して低いとは言えない。彼の造反を未然に防ぐには、一刻も早くシュネーゼルの割譲を実現させ、共和国政府が連邦と結ぶしかないのだ。その点に関してはどうだ？」

「同感です。連邦は、共和国が十分な対価を示すならば、シュネーゼルを割譲してもいいと考えているようです。しかも、その対価は金銭、あるいは何らかの産物である必要はなく、軍事力であってもよい、と」

「それで……シュレーダーという駐在武官がマールクの意を受けているというのは確実なのだな」

「シュレーダーというのは偽名です」

デュランは指摘する。メル・ヤンデキフィティ第七艦隊司令官が、メルビン・シュレーダーの正体だ。ザモフの眉間に険しい皺が刻み込まれた。

「大物じゃないか……マールクは、“七提督”のひとりを連邦首都星へ送り込んで工作をさせていた、ということなのだな？」

「そのようです」

ヤンデキフィティの目的が、単なる情報の収集に過ぎない、などとデュランには思いもよらなかつた。ヤンデキフィティの活動は精力的だった。半年の駐在期間中に、連邦空軍の研究機関、軍事施設多数を視察しただけでなく、政治家や軍需産業界の代表者とも会談を繰り返した。無論、不自由なく操れるほど連邦公用語に堪能ではないヤンデキフィティである。つき従つた従兵たちを買収すれば、用談の内容などさして困難なく知ることができたのだ。

実のところ、さして深刻な内容を、ヤンデキフィティは口にしたわけではなかつた。マールクが彼に命じたのは、一般的な情報の収集であり、諜報活動ではない。少将とはいえ、若すぎるヤンデキフィティに諜報活動ができる技巧など期待するべくもなかつたのだ。

デュランは錯誤に陥っている。マールク艦隊の“七提督”の一員たる有能な提督、という偏見のもとに、彼はヤンデキフィティを見ていた。マールクが、腹心の一人のヤンデキフィティを、意味もなく連邦に派遣するはずがない、と。

デュランの娘であるコーティは、ヤンデキフィティのことを評したことがある。“なんだか嘘をつくのが大嫌いですって感じの人が軍服着てたら、提督閣下みたいになるんじゃない？ ああいう人って、怒らせるときつと怖いよ。”

“剽悍な猛将”と言われるヤンデキフィティの本質を、彼女の方が見抜いていたことになるのだが……

しかし、間違いはないのか。我が軍にも少将・准将クラスは数百人のオーダーでいるぞ。わたしでも 全員の名前はとても

誦そんじられない”

「間違いありません。サングラスをかけるくらいの擬装では、わたしをごまかすことはできません」

ヤンデキフィティとは面識がある、というデュランに、ザモフはもう一度驚いたような皺を眉間に刻んだ。

「なるほど、個人的に面識があったというわけか……それは貴重な情報だな。つまり、マールクは、最高幹部の一人を派遣して連邦との接触をはかった……ということになるな。マールクの造反の可能性は、これですますます高いものになった。違うか？」

「確かに……」

「我々としては、フェレラ首相にこの情報を示して、シュネーゼル割譲を早急に進めるよう進言したい。われわれはドロク総長を信用しない。彼は、きみのレポートの内容を、マールクへの個人攻撃の材料にすり替えて、連邦との開戦謀略に利用しよう」と試み

るだけのことだろう。ドロク総長にきみのレポートを提出しても、そのままの形でフェレラ首相にわたるとは考えられないな」

「……では？」

従兵がコーヒーポットとマグを載せたトレイをもって現れ、会話を束の間、断ち切る。従兵を下がらせ、ザモフがコーヒーを注ぎ分けた。

「……！」

一口啜って、デュランは不味さに驚く。知らず知らずの内に、連邦のコーヒーの味に慣らされてしまっていたらしい。一方、ザモフの方も顔をしかめてマグカップを空け、一度断ち切られた話題に立ち戻った。

「策はある。こうするのだ……」

七一九年七月、アリシア・ミュッケルは、共和国上院議会外交委員会に一件の案件を提出する。連邦政府の長たる連邦大統領に親書を送付し、シュネーゼル割譲のための具体的な条件を提示しようというものだった。

「……シュネーゼルを共和国の新たな領土に加え、共和国の未来への発展を約束した……そつなれば、あなた方、外交委員会のメンバーは、共和国史上不滅の名声を讃えられることは間違いありません」

この手の論法を、アリシアは好きではない。共和国上院議会を占めている議員のほとんどが、すでに金銭的にも社会的な地位に關しても十分以上のものを獲得し尽くしている。彼らを動かすものがあるとすれば、名誉欲しかないことをアリシアは、ここ数年の経験から十分に心得ていた。

アリシアの説得と、フェレラ首相からの圧力により、外交委員

会としての親書送付が決定されたのは八月初め。後に「アリシア・ミュツケル書簡」と呼ばれる親書である。

「これで一段落、つきそうですね」

外交委員会での議決の行われた夜、フェレラは自らアリシアに映話を寄越したものである。

「連邦の大統領が具体的なアクションを起こしてくれれば、参謀本部も無下に拒否することはできなくなる」

「ええ……そうだといいですけれど」

参謀本部の頑迷さを、いやというほど知るアリシアである。無条件には樂觀的にはなれなかった。

「確かに参謀本部は両国の和平にとって巨大な障壁です」

フェレラは声をひそめた。

「ミス・ミュツケル……シュネーゼルの割譲が成功したら、わたしは参謀本部を解体するつもりです」

「首相？」

アリシアを驚かせるのは簡単なことではない。弟のネイですら、姉に驚かされたことは無数にあるにしても、姉のサファイア・グリーンの眸が驚愕に見開かれるのを目にした経験は数えるほどしかないのだ。

フェレラは、自分引き起こした現象の希有さに関する認識には欠けている。

「一朝一夕にはできることではない。知っています。だが、ミス・ミュツケル、あなたもおっしゃったが、シュネーゼルの獲得に成功し、共和国の発展を約束すれば、わたしには共和国史上不滅の名声を与えられる……違いますか？」

「では？」

「さよう……実際のところ、名声は不滅ではない。しかし、多少の期間、それを得た人間にオールマイティの権限を与えることになりませう。」

参謀本部が共和国にとって害悪以外のなにものでもないこと……多少とも心あるものなら知っています。しかし、取り除くどころか、立ち向かうにしても強力すぎる組織です。名声といい、英雄の名という。それらの背景なしには、シュネーゼルは、その意味でも必要だ」

「ええ、そうですわね」

参謀本部が解体されたとしても、共和国を覆つ「中世的頹廢」が姿を消すわけではないだろう。参謀本部が共和国を停滞させたのではなく、共和国の社会を覆い尽くした虚無と頹廢とが、特に参謀本部に強く現れたに過ぎないのだ。しかし、「宇宙の大義」、あるいは「聖戦」……内実を伴わない空虚なスローガンを言いつて、共和国市民を戦争に駆り立てるだけの組織の消滅は、息詰まるような共和国の社会に、多少の新しい風をもたらしてくれるのかもしれない。

もし、シュネーゼルが共和国のものとなり、そこにフロンティアが築かれるのなら、行ってみたいと思う。共和国圏を覆つ暗黒星雲の向こう側、煌めく星々の大海の中に浮かぶフロンティアに……自分は、政界などという不毛な世界から、弟は破壊と殺戮に狂奔する軍事組織から退いて、平凡な一市民に戻るのだ。

夢だったのかも知れない……とアリシアは後になって思う。周囲を覆つた絶望と頹廢の厚い灰色のヴェールがほんの束の間開いた隙間から、自分は最も美しい未来の夢を見ていたのかもしれない……と。

アリシアは、通話を終わる合図を送った。

「幸運をお祈りします……首相には、それが是非、必要ですから」
“あなたのような美しい女性に祈られたのでは、幸運の女神は嫉くかもしれない。程々で結構ですよ、ミス・ミュツケル……それでは、よい夢を”

よい夜を、とアリシアは映話を切る。七一九年八月六日。それが、ピセンテ・フェレラと交わした最後の通話になることを、明敏なアリシアもまだ知るところではない。

「こつこつ……ひよつとして首相官邸の近くじゃないの？ 政府高官つて……」

低いアルトの声が、朝靄の切れないレイヴェルゲンの空気を震わせる。共和国首都レイヴェルゲンの八月。海沿いの都市であるレイヴェルゲンは、しばしば朝靄に包まれる。

「しっ！」

「パパ……」

「声が高い」

「あたしの声が高いはずないじゃない」

今度は笑いを含んだ声が、辛うじてハスキーにならない程度にさらに低い。

「イエルスブルグ砂漠でいっつも咽喉にサンドペーパーかけてたんだから」

「つたく。口ばかり達者になって……」

「怒らない、怒らないつて」

デュランが何といおうと、コーティはまったく相手にしない。

いたずらっぽくくるめかしていた瞳が、見慣れないものを目にした戸惑いを浮かべる。朝もやを割るようにして、白っぽいスーツを身につけた男が、姿を現したのだ。一応は私服姿だが、全身に漂う雰囲気は、暴力のプロであることを無言のままに告げている。

「失礼だが、どちらへ行かれます？」

丁寧な調子だが、有無を言わせない威圧のこもった声だった。

「デュラン・バードフェザーといいます。首相閣下にお会いしたいと……」

えっ？……という表情で、コーティが父の顔を見直す。首相官邸の近くに来ていることはわかっていたが、一介の少佐にすぎない父が、フェレラ首相と直接会えるはずなどないではないか。

しかし、デュランは平然として語をついだ。

「イエルスブルグの市民団体の代表として参りました。イエルスブルグの治安状態に関して、首相閣下に陳情したく、レイヴェルゲンまでまいりました」

「パパ……」

コーティが浮かべた不安げな表情を、しかし、デュランは無視する。

「なるほど、イエルスブルグのね？ 失礼ですが、身分証明書、および首相閣下への紹介状をお見せ願えますか。そちらのお嬢さん
も」

「身分証明書？」

「ハイ・スクールのIDがいい」

デュランとコーティの差しだしたIDカードと、紹介状、そして陳情書を収めた光ディスクを、件のシークレット・サービス……

であることは、コーティの目にも明らかだった……は、ポケットから取り出したハンディ・ターミナルにかける。

「……？」
父の額に微かに浮かんだ冷たい汗に、コーティは気がついた。

「……なあんか、危ヤバそうな仕事だなあ。パパって人がいいから。オーケイです」

「やああって、シークレット・サービスが書類を返してくれた。受け取るデュランの腕が僅かに震えている。」

「今、首相は官邸の周りを散策されています」

「これはご親切に……」

礼を述べ、デュランはコーティを促した。ぴよこん、という感じで礼をするコーティの姿を、シークレット・サービスは感情のこもらない視線で見送った。

早朝、フェレラ首相が官邸の周囲を散策するのは、彼にこく近い側近だけに知られた習慣である。

八月七日の早朝バードフェザー父娘が現れた時も、フェレラは、もやに包まれた官邸周辺の舗道を散策しているところだった。

「きみたちは？」

半世紀近い、いつてみれば“情眠”に近い政治家としての経歴の末尾を、フェレラは、なるうことなら華麗な“共和国を滅亡の縁から起死回生させた大政治家”としての金文字で飾りたかった。惑星シュネーゼルの割譲交渉に成功し、参謀本部の権限を大幅に削減し、共和国に新時代を招き寄せれば、彼の望み……野望に達しないことを、フェレラは認めている……は達成されるだろう。シエルメス連邦は、シュネーゼルの割譲に好意的であり、代償の一部として、海賊行為の鎮圧に共和国宇宙軍艦隊を連邦空軍に協

力させようとするフェレラのアイデアには、マーク元帥も賛意を示していた。

「デュラン・バードフェザー、こちらは娘のコーティリアです」

シークレット・サービスに語ったのと同じ内容を、デュランは繰り返して、光ディスクを収めた封筒を手渡した。陳情書めいた文書も確かに入っているが、“バードフェザー・レポート”が、その主要な内容である。

“陳情者を装って、散策途中の首相に直接手渡すのだ。あとは、首相の側近に潜り込んで、我々の仲間がうまくやってくれる。紹介状とIDカードは用意させる。きみが参謀本部第五部局長であることを、シークレット・サービスに気づかれると、首相には接近できなくなる。首相は、参謀本部をきらっている。無理もないことだが”

それがザモフからの指示だった。

「ほ、これは重いね」

「はあ、市民の大多数からの要望ですので、ディスクにしても数枚以上になってしまいました」

「イエルスブルグの事情は聞いたことがあるよ。そんなに悪いかね」

「最悪です。この娘がハイ・スクールに通うにしても、毎日が戦争のようなものですから」

「そいつはひどいな。とくかく、これは預かっておく。検討の資料にさせてもらうとするよ」

「光栄です、首相閣下」

「なに、そう長いことではない。その内に、共和国にも新しい時代が始まります。何もかも、いっぺんに良くなるわけではないが、

まあ今よりは多少良くなるだろう」

長く居座ってはいけない……というのもザモフからの指示にあった。コーティを連れていくことで、相手の警戒心もゆるむだろう。が、彼女がフェレラから問いただされれば、会話の端々からでも、容易に彼らの素性がばれてしまう。

約五分、デュランとコーティは、散策を続ける首相の後ろ姿を見送った。

「さ、行こうか、コーティ」

汗を拭う父に、コーティの視線は非好意的だった。

「あのさあ、パパ。大丈夫なの。あたしのIDだって……」

「大丈夫だ」

「危ないなあ」

コーティは、鼻の頭にしわを寄せた“チェシャ・スマイル”。彼女の参謀本部への忌避は、明らかにアリシア・ミュッケルからの影響である。

「ほんとに大丈夫？ パパの仕事に巻き込まれて、挙げ句の果てに死刑、だなんてまっぴらだよ。あたしだって、ちゃんと孫に囲まれて、猫を膝にのっけてサンルームでひなたぼっこする平和な老後を迎えたいんだもの」

「コーティ……」

デュランは頭痛を覚える。

「まだ一七にもなっていないうちから、老後の話はないだろう」

コーティは平然としている。

「歳月、人を待たず、っていうじゃない」

「そうかね？」

閃光が走った。同時に腹に響くドン、という爆音が轟いたのは

その瞬間だった。一瞬のタイムラグを置いて、明らかに天然のものではない爆風が二人の頬を激しく拍つ。半瞬間だけたちすくんだコーティの傍らに、大きな音をたててなにかが落ちてきた。

「……！」

思わず悲鳴をあげ、父の腕にすがりつく。もぎ取られ、血と硝

煙にまみれた人間の腕……！

「あ、あれって官邸の方だよ」

「な、そんな馬鹿な……」

首相官邸の方向から、大きな爆煙があがっている。

「ば、爆弾？」

「……らしい。あの様子だと、かなり強力なやつだ。テロかもし

れん。かわり合いになつてはまずい。急ごう」

「警察に行かなくても大丈夫かな。あたしたちだって近くにいたんだよ。こそこそ逃げたりしたら、犯人にされちゃうよ」

「そんなことはない。大丈夫だ」

なおも渋るコーティの腕を、デュランはやや強引に引き立てる。最寄りのCVSのステーションへ急ぎながら、彼は呟いていた。

「……テロか。大方、参謀本部の主流派が、首相の改革方針に反発して、テロリストを煽動でもしたんだろうが……いずれにしても、わたしの任務とは関わりのないことだ」

デュランの予想は前半だけ正しく、後半はまったく誤っていた。

最初に気づいたのはコーティの方だった。

「変だよ、パパ。警官が……」

「な……？」

「デュラン・バードフェザーと、コーティリア・バードフェザーだな？」

居丈高な声。

腰のレイ・ガンの銃把に右手をかけ、左手に完全鏡面仕様の対レーザー・シールドを構えた完全武装の警官が二人、かけよってくる。

「なに？」

「手を挙げて首の後ろで組め。抵抗するな。抵抗した場合、発砲してもよいとの命令を受けている」

「なんだって？ わたしたちが何をしたというのだ」

「テロリストが、盗人猛々しい！ ビセンテ・フェレラ首相暗殺容疑だ。貴様たちにはあらゆる尋問に対して黙秘する権利と、弁護士に連絡する権利が与えられるとともに、すべての発言が犯罪に關する証拠として採用される」

「さて、待ってくれ。フェレラ首相暗殺だって？ 私は、何も知らん。馬鹿も休み休み言ってくれ。何の証拠があって、私が犯人だなどと決めつける。大体、私たちはたつた今、帰宅したところだ。何があったのかさえ、知らないんだぞ」

必死の抗弁を嘲笑が迎える。

「どこへ行ってきたかは、わたしが教えてやろう。首相官邸だ。違うか？」

「……！」

「凶星だろ。デュラン・バードフェザーとコーティリア・バードフェザーと名乗る二人組のテロリストが、イエルスブルグからの陳情団を装って、首相に爆弾を手渡した、首相付きのシークレック・サービスからの報告も入っているのだ」

「ば、爆弾だって……？ とんでもない、私は何もしらん。爆弾など、渡してはいない」

「爆弾じゃなかったら、何を手渡したんだ、ええ？ 言ってみろ」

「それは……」

ザモフからの指示では、今回の任務は絶対に秘密を要することになる、とのことだった。が、問いつめられて口こもるデュランに代わって叫んだのがコーティだった。

「パバの仕事よ。参謀本部に問い合わせてみたらどうなの？」

「生意気な口を叩くんじゃない、テロリストのかたわれが。無論、参謀本部にも問い合わせは行っているさ。参謀本部のどの部局にも、デュラン・バードフェザーなどという少佐はおらんという返事だ。さあ、同行してもらおうとしようか。まだ、言いたい戯言があるんなら、出るべきところでのことにしてもらおう」

「さて、コーティは何の関係もない」

電磁手錠をかけられながら、デュランは、警官たちがよつたかつてコーティの肩を押さえつけて手錠をかけようとしているのを目にしたのだ。もはや、任務の秘密も何もなかった。

「関係の有無を判断するのはわれわれだ。首相に爆弾を手渡した時、この小娘もたしかに同行していたはずだ。無関係とは言わせん」

「あれは命令だった。娘を連れていけば、首相に会い易くなるから……と」

「ほう……？」

返ってきたのは、露骨な嘲笑。

「誰の命令だって？」

「ユーリイ・ザモフ少将閣下。参謀本部第五部局長だ」

「お前なあ」

嘲笑が嘲笑にとつてかわっていた。

「どこからそういう名前をみつけてきたのか知らんがな。ザモフ局長は、一か月前からドライバオム要塞の視察中だということだ。母星との通信記録すべてを調べても、お前さんとの連絡など有り得ないというのが第五部局の回答だ」

あ、やっぱり……とコーティは思う。なんだかよくわからないけれど、どうやらパパはいいように利用されていただけみたい。パパもおめでたいのよね。少将とか中将とか、偉そうな肩書き持っている人って、本当に信用ならないんだから。

「人を騙すなら、もつ少しよく考えてからにすることだな。まあ、娘には手錠は勘弁してやれ。部屋は封印して、証拠を隠滅されないように注意しろ」

公平に見て、かなり絶望的な状況であることを、コーティも認めざるをえない。パパがいくら頑張ったって、とても信じてはもらえないだろうし……と、警官隊一個連隊相手に、一七の女の子一人が脱走できるというほど、現実には甘くない。もつとも、愛用のエア・バイクでなら、大部分の地上走行車を振り切れる自信はあったけれど。逃げたとしても、その先の展望があるわけでもない。昼間の冗談が現実になりそうだったが、コーティにはまださして現実感がなかった。なにか、非現実的なベールの向こう側の出来事、といった気分が確かにあったのだが……

官舎から連れ出され、パトロールカーへ連行されていく途中、コーティは父の視線に気がついた。パトロールカーからは約二〇メートルほどの駐車場の隅に、コーティのエア・バイクがとめてある。警官隊は彼ら父娘の周囲と、パトロールカー、それに官舎

の出入り口の周辺に群がっていて、エア・バイクから駐車場の出入り口まではからっぽだった。デュランは、コーティの目を見つめ、バイクに視線をおくり、そしてうなずいた。

「おい、何をしている！」

威高丈な罵声をあげ、若い警官がデュランをこづきまわした。逃げる振りをしながらデュランはポケットからカードのようなものを掴み出している。警官の殴打が彼のわき腹をとらえた瞬間に、カードは地上に落ちた。

「……！」

閃光と炎、刺激臭を伴った猛烈な白煙が駐車場を覆う。

コーティを監視していた警官も、閃光で目をやられたらしくうめき声をあげてうずくまり、あるいは白煙をしたたかに吸い込んで激しくせき込む。

「に、逃げたぞ！」

誰かが叫んだ。コーティはエア・バイクにダッシュする。彼女自身も閃光で目を少しやられて、視界がエメラルド色のもやのなかにあった。それでも、予め見当をつけてあった方向に走る。まもなくエア・バイクのハンドルの手慣れた感触が、両の掌の中にあつた。キー・カードを差し込むのもどかしく、スターター・レバーを蹴り込む。燃料噴射音が響き、ガス・タービン・エンジンが咆哮を上げる。シートに飛びのり、アクセル・グリップを目一杯に吹かした。

「止める、脱走だ、暗殺犯人が逃げるぞ」

「暗殺犯人なんかじゃないよっ！」

一声叫び、コーティはバイクを飛び出させる。未だ、駐車場を薄く覆うような白煙を突っ切ってコーティのバイクは官舎の敷地

を走り出る。勇敢にも身を挺して立ちふさがった警官が熱線銃を構え、叫ぶ。

「止められ、撃つぞー！」

ためらうことなくアクセル・グリップを全開、ステアリング・レバーを思いっきり引き寄せる。全開されたガス・タービン・エンジンの発揮するすさまじい後方噴射が車体を軽々と宙に持ち上げた。銃を構えていた警官が、奇声を発して頭を抱え込む。その頭上を躍り越えると、そのまま片方の膝が路面をこすりそうなほどのライディング・スタイルをとって急コーナーを回り切った。急発進して進路をふさごうとしたパトロールカーが、見事に鼻先を躲かれ、躲されたもの同士が互いに轟音をたてて衝突する。

警官隊がようやく態勢をたてなおしたとき、コーティのエア・バイクのテール・ランプは夜の闇のなかに溶け去ったあどだった。ただちに、共和国首都全域に連絡が飛び、首都から郊外に繋がるハイウェイ、フリーウェイのすべてに非常線が張られる。

「フェレラ首相暗殺犯人の一人、コーティリア・バードフェザーはエア・バイクにて逃走。発見し次第、追跡、逮捕せよ。万一、抵抗がある場合、あるいは抵抗があると予測される場合、銃器の使用も許可する。」

ひどいことになった……

走り慣れていないハイウェイを敢えて敬遠し、一般道路をやみくもに走りぬけるコーティの瞳は乾いていた。自分は平凡なハイ・スクール・ガールに過ぎないのではなかったのか？ 何を一体、どう間違ったら、自分がこういう目に遭わなければならないとい

う結論になるんだろう、とも思う。

若い警官に殴り倒されていたデュランの姿を、コーティは網膜にとどめている。もう、これで会えなくなってしまうのだろうか……それが悲しい、というより、今の段階では不思議でしょうがなかった。宇宙軍の軍人だから、仕事に危険が伴うのは当然のこと。しかし、戦争もなくなつたし、まして艦隊勤務からはずれていた父との離別が、こつも唐突にやつてこようとは思わなかった。コーティ自身は一〇代の半ばを過ぎたところだし、デュランにしたところで、まだ当分は死ぬつもりはないはずだった。

どこへ逃げたらいいのだろう？

巧みにバイクを操り、狂ったように走り回るパトロールカーを一〇台以上もやりすごしてから、コーティは基本的な問題にまず目を向けることにした。このまま走り回つても、レイヴェルゲンを出ることすらできないだろう。見つければ、当然、首相暗殺犯人として裁かれる……

……フェレラ首相、か……

アリシア・ミュッケルが、フェレラ首相のことを話していたのを思い出す。数学は得意だが、こと人文科学はからきしのコーティにとつて、政治にはどこか得体の知れない不気味さがあった。だから、アリシアの口にした内容を完全に理解した訳ではなかった。が、それでも、フェレラがシエルメス連邦とか言う異星人……異星人という単語も、今一つコーティの理解を超えている……との戦争を回避しようとする努力している唯一の政治家だ……アリシアの解説ではそうなっていたような気がする。

……シエルキッヒの北側の丘陵地をね、シエルメス大使館員のリクリエーション用地として、大使館の敷地と同じ扱いをする

ようにしたそうよ。治外法権にすると、犯罪者が逃げ込む、とか言って、かなりの反対はあったそうだけれど」

……犯罪者かあ……

犯罪者になるつもりなどまったくなかったのに……パパは、はめられたんだ。あのとき電話してきたザモルクだったか、アナトールだったか言う“古い友人”に。

絶望的な状況なのだが、この少女の発想は一向に悲愴な方向へ向かわない。

「犯罪者なんかになりたくないって言ってるのに、無理やり、仕立てあげちゃおうっていうんだもん。それならなってあげなきゃ、期待に背くっていうもんだわよね」

燃料計を確認する。レイヴェルゲンの北、シエールキツヒまでは三〇〇キロ以上のスピードで飛ばすのに十分な燃料があった。

「きのう、いれといて良かった」

走り回るパトロールカーの咆哮がおさまるのを待つて、コーティはダウンタウンから走り出た。気付いて追走してくるパトロールカーを、驚くほどの確なコーナリングで、次々に脱落させると、シエールキツヒへ向かうハイウェイへの傾斜路を一気に駆け上がっていく。

“首相官邸に爆弾テロ。ピセンテ・フェレラ首相を含む五人以上が死亡、三〇人近くが重軽傷”の知らせを、ユーリイ・ザモフ少将は参謀本部の執務室で受け取った。

「重要容疑者はデュラン・バードフェザー少佐とその娘のコーティリアのふたり。バードフェザーは、連邦母星滞在中にシエール

メス連邦空軍の勧誘を受け、ダブル・エージェントとして首相暗殺を決行した。共和国圏内への侵略を狙う連邦は、両国間の決裂をねらい、今回のテロに及んだ……」

「よくできたシナリオだが、娘の方はどうするのだ？」

自画自賛するかのようなザモフのせりふに、聞く者をして、不愉快さのどん底に沈ませるような、ざらついた声が続いた。

「そちらの方も万全です。なにしろ、母親が反逆者ドレド出身の混血児ですから。戦役で母親を殺されたことで、共和国に抜きたい憎悪を抱いていた、ということにして発表します。最近のペーパは、自分で事実関係の調査などはしませんから。楽になったものです」

「その通りだが、油断はするな。現に娘の方を取り逃がしたというではないか」

「ハイ・スクールの小娘一人に過ぎません。次長閣下は、共和国政府を挙げての追求から、ハイ・スクール・ガール一人、見事に逃げおおせるとでもお思いですか」

「そうは言わん」

“秃豚閣下”こと、フォルター・ワシエック大將は面白くもなさそうな口調で応えた。

「私に気に入っているのは、貴官をふくめて、楽観しすぎているということだ。この場合、逃げるとすればデュランの方であって、コーティリアの方であってはならない。油断し過ぎていたのではないのか？ いずれにしても、私は予定通りにことが進まないのを好まない。予定通りでないのは、何かしら手抜きがあった、という証拠なんだからな」

「心します。あすの朝までには、コーティリア・バードフェザー

の逮捕、ないしは射殺のお知らせをお持ちするでありましょう」

「よろしい。貴官の手配したことだ。そうそう間違いがあはずもないからな。わたしは、休息室にいる。緊急の時はそちらに連絡し給え」

「了解であります。長くはお待たせしないつもりであります、閣下」

ワシエックは特に返事を返さず、じろりと非好意的な視線を投げつけただけだった。次長休息室に戻った彼は、カルシュ産の高級ワインを一本からにすると、そのまま仮眠ベッドに潜り込んでしまったのである。

ザモフには、ワインを空けて高いびきをかくなどという警沢は許されていなかった。彼は八日の夜明けまで執務室に詰めきり、コーティが逮捕されたとの連絡を待ち続けた。しかし、八日の午前五時二三分、レイヴェルゲン・シエルキツヒ管区警察本部から入った連絡は、彼の期待を完全に裏切る内容だったのである。

「レイヴェルゲン・ダウンタウン管区本部が、シエルキツヒ・ルートへのランプへ侵入してくるエア・バイクを発見、非常線で停止させようとしたのですが、そのエア・バイクは、異常なほどの高出力を発揮して非常線を突破……」

「反抗するようなら射殺してもよい。そう命令してあつたはずではないか？」

「しかし、相手が一般市民。それも少女だということ、現場では発砲の命令を下しかねたようで……」

「もういい！ それで追いかけたのだからうな」

「高速パトロールカー二〇台を動員、その後、シエルキツヒ管区本部の増援一五台を得て、徹底的に追走したのであります」

が……」

「逃げられたとでもいうのか？」

「それが……信じられないほどのドライビング・テクニクで我々のパトロールカーを次々にクラッシュさせ……その、五台がガードウォールに激突、四台が相互に衝突を起こし、六台がスピンを引き起こして使いものにならなくなりました」

「一体、貴官らは誰を追いかけていたのか？ たかがハイ・スクール・キッド一人ではなかったのか？ それとも超一流のロードレーサーだった、とでも弁解するつもりか」

「……は、しかし、とにかく、最終的には銃を使用して停止させようとしたが、何分、高速走行中の射撃訓練などはまったく行われておらなかったもので……」

「言い訳はもういい。それで、バードフェザーの小娘は、いったいどこに逃げ込んだのだ？」

自身、クラッシュを起こしたパトロールカーに乗り込んでいた中年の警官は、手ひどく打ちつけた打撲の痛みで顔をしかめながら、ある固有名詞を口にした。見る見る蒼白になるザモフの表情に、彼は些かならず溜飲をさげていた。そんなに逃がしたくなかったのなら、自分で空兵部隊を率いて陣頭指揮に立てばよからうに。後方の、絶対安全なところに居座って、前線の指揮官を罵っているほど楽な仕事はないだろう。

絶句するザモフをスクリーンの向こう側に見やりながら、彼はとどめの一言をたたきつける。

「閣下の責任において、踏み込めとおっしゃるのなら、我々は直ちに出勤いたします。どうか、ご指示を……」

そして、返ってきた返事は、まさに彼の予想した通りのものだった

た。

「さて、早まるな。こちらも上の判断が必要だ。いつでも踏み込める態勢で待機しろ。許可がおり次第、連絡する」

どの辺の上なのやら……と、警察勤めの長い件の警官は苦笑いを隠せない。失敗と降等を何より恐れる参謀将校である。自らの責任で収拾のつかないような問題を引き起こす度胸などありはしないはずだった。特に今回は……

コーティ・バードフェザーは、シエルメス大使館に治外法権特権付きで貸与されたシエーネベルグ・エリアに逃げ込んでいたのである。シエルメス大使館の同意無しに踏み込めば、当然のように外交問題を引き起こすはずだったのだ。

駐ル・ラント連邦大使館囑託としてレイヴェルゲンに駐在していたテリー・テラサキ・リヴァーズがこの日にシエーネベルグ・エリアで一夜を過ごしていたのは偶然である。連邦空軍のコンピュータネットワーク“ユースレスク”に組み込む自動翻訳システムのための言語関連データ収集……それが彼に委嘱された仕事であり、多忙な仕事の合間を縫って、彼はシエーネベルグ・エリアをしばしば訪れている。

六日にシエーネベルグに入った彼は、首都を震撼させたフェセラ首相暗殺事件をまったく知らなかった。もともと、知っていたとしても、彼は言っただろう、“関係ないね”。

シエーネベルグ山脈を後背地に控えるシエーネベルグ・エリアはさしたる高山ではない。また、山脈の向こう側は、内陸性の乾燥した砂漠である。山なれたテリー・リヴァーズは、連邦母星で

のピクニックと、さして変わらぬ装備でも不安を覚えなかった。

「……？」

八日の夜明け近く、まる二日、シエーネベルグ・エリアの踏破に費やし、その東斜面の一角でビバークしていたリヴァーズは、不意の物音にびくりとして跳ね起きた。斜面を踏み砕く音に続いて、なにかが倒れ、転がり落ちていく物音。

「……おっと、こいつは……」

うかつだったかなと思う。天然の猛獣……熊に類する何か……が生息しているのではないのか……見かけの平和さから、身の危険など有り得ないと独り合点していたのだが。

闇を透かし見る……が、月もでていない完全な闇夜である。レイヴェルゲンの市街地からの照り返しで、幾分かは明るいし、夜明け前の薄明状態ではあるが、視界は何メートルとない。息を殺して数分。それきり気配は途切れた。

熊ではなかったらしい……リヴァーズは、緊張を解き、安堵のため息をつく。地表の四割を、放射能に汚染され、荒れ果てた惑星は、人生の終焉の場所にするには、余りに殺風景だ。東の空の明るさが増し、しだいに視野が広がっていく。連邦母星と同じく、この惑星でも太陽が東から上るのは幸いだった。連邦母星と逆方向に自転し、西から夜があげていく惑星も、連邦圏には少なくない。

「……んつと、これはまた」

緩やかな斜面は、地にぼつかりと開いた地溝によって唐突に断ち切られている。ビバーク地から見おろした視界の端に、斜面のはしに引っかかるように倒れている人影が映ったのだ。疎らに生えている灌木に引っかかりかかったらしい。運のいいことである。地溝

に転げ落ちていれば、命はない。斜面には、足を滑らせて転げ落ちたらしい跡が数メートルにわたって残っていた。

「ほい、お転婆さん。しつかりしな……」

ミイラ取りがミイラ取りにならぬように、注意深く歩み寄り、倒れている人間を抱き起こす。さして注意力の発達していない人間でも、倒れているのが、小柄な女の子らしいことに気がつくのに、そうは苦労をしなかっただろう。もっとも、連邦の一部の地域で流行しているように、若い男でも髪を長く伸ばす習慣が、この共和国母星にもあれば、話は別になる。

「おや、こいつは……」

ありふれたジャケットとジーンズを身につけた、一六、七歳の少女……もっとも、リヴァースは、ル・ラント人の女性の年齢を、その的確に言い当てる自信は持っていないが……だが、そのジャケットやジーンズのあちこちが焼け焦げ、特に左腕の上膊部は、レイ・ガンがそれに類するエネルギー・ビームに掠られた跡も歴然と、生々しく焼けただれている。彼女がただ道に迷ったわけではないことは明らかだった。

ファースト・エイド・キットで応急手当を施してやる。火傷の跡に消毒薬のスプレーを吹き付け、幅広のリヴァ・テープで覆った時、少女がわずかに身じろぎした。

「気が、つきましたか？」

リヴァースの共和国公用語は、大使のフェルトリック・キャスパーほどには達者ではない。共和国公用語を最初に解読したのはリヴァースだが、解読のエキスパートが、そのまま語学のエキスパートという訳には行かなかった。

「だれ？」

「テリー・テラサキ・リヴァース。シエルメス人」

「シエルメス人？」

「大使館員。私は休暇中です」

「休暇中に野宿すんの？ やっだなあ、変人だよ、それって」

「もう少し、ゆっくりしゃべってくれませんか」

早口の、それも省略形の多い俗語にすんなりついて行けるほど、リヴァースのヒアリングは達者ではなかった。

「ついて行けないのです」

「え？」

「私はシエルメス人です。共和国公用語は、母国語ではない」

「あ、だから、そんなへんてこりんな喋り方なんだ」

「ヘンテコリン？ そう、変な喋り方かも知れませんが、通じるでしょう？ 洒落た言い回しにまでは、手が届かない。正確な、喋り方。それが第一義です」

「第一義？ すごく言い方だね。でも、ありがと。手当してくれたんだね」

少女は、火傷の痛みを顔をしかめる。

「あ、撃たれたって思ったら、じゅうって、やーな音がしたよ。酷くなってた？」

「皮膚の移植が必要です。でないと、跡が残ります」

「まだ、腕がくっついててよかったです。レイ・ガンでも撃たれるとね、腕ごと燃えちゃうんだよ。知ってる？」

「聞いたことはあります。ところで、お嬢さん。私は名乗りました。あなたは、わたしに、あなたの名前を知らせてくれないのですか」

黒い瞳が、ちょっと驚いたように見張られ、すぐに照れくさそ

うな微笑がとってかわった。

「ごめん。あたし、コーティリア。コーティリア・バードフェザー」
「それでコーティリア、なんでここにいるのです？ 誰が、あなたを撃ったのですか？」

「逃げてきたのよ。話せば長くなるよ。ここで聞きたい？」

「少なくとも、誰に逐われているのか、それは話してもらいたいです」

コーティは、ちよっとためらう。「犯罪者」と知れば、このリヴァーズと名乗るシエルメスシエルメスは、彼女をかばうことを拒むだろう。悪くすれば、このまま警察に引き渡されることもありえる。

「警察」

「警察。つまり、あなたは犯罪者ということですね」

「そうなるよね」

「それは困る。私は、共和国の犯罪に関わるわけにはいかない」

「ちよ、ちよ、ちよと待って。待ってよ、リヴァーズさん」

「テリーで十分分かります」

「じゃ、テリー。あたしがね、そんな悪人に見えるの。一七の女の子が、警官隊に追い回されなきゃならないような、そんな悪事ができるとでも思ってたの？」

「連邦には、一四歳で水素爆弾を作って、自治州政府を脅迫したテロリストがいました」

「っもっ、このわからずやー！」

「わからずや？ その言葉を知りません。どういう意味です？」

「んっもっ、これじゃ、話にならない。共和国政府の首相が、暗殺されたんだ。その犯人が、あたしとあたしのパパって、そっ

うことになっちゃんだ」

「暗殺……ね」

「あたしたちが首相に爆弾を手渡したってことになってるの。でも、爆弾なんてしらないよ。パパは、首相に渡しなさいって、命令されただけなんだ。あたしなんか、おまけみたいなもんだもの。官邸で爆発があつて……びっくりして、そのまま家に帰ったら、

警官隊が押し寄せてきて……パパが、それでもあたしだけ逃がしてくれた。レイヴェルゲンのダウンタウンからここまで、何十台もバトカーが追ってきたよ。撃たれたし、ヘルメットまでぶつとばされた。もう少して殺されそうになったんだよ。なんで、あたしやパパがこんな目に遭わなきゃなんないの。酷いよ、酷すぎるよ、あんまりだよ……」

言い募るうちにうちに、激してきた感情が堰を切るように目尻から溢れて出てきた。父デュランと、もう二度と会えないかも知れないと思うと、どうにも抑えようがなくなったのだ。ほんの二〇時間前までは、こんなことになるとは思いもよらず、デュランと軽口を叩き合っていたと言つのに……めちゃくちゃな早口になった彼女について行けず、困惑して肩をすくめるリヴァーズにはおかまいなく、彼の腕にすがりついて泣きじゃくる。

「パパア……パパア……」

「オーケイ、オーケイ、コーティリア。一応、あなたをシエルメス大使館に連れていく。あなたの話の真偽は、専門家の判断に委ねるしかないでしょう」

「専門家？」

「専門家。どんな専門家かまでは知りませんが、とにかく専門家はいます。歩けますか。歩けるなら、ついて来給なさい」

立ち上がりかけ、コーティは脳天にまで突き抜ける激痛に悲鳴をあげる。念入りに足首まで捻挫しているようだった。

「やれやれ、手のかかるお嬢さんだ」

これは連邦公用語で啖き、リヴァーズはコーティを背にかつぎあげる。小柄なコーティだが、リヴァーズの方もさして力仕事になれているというわけではない。山麓にジープを止めてあるが、そこまでの約二キロばかりはかなりしんどいことになりそうだった。

実際、疲れた。

リヴァーズは、首都レイヴェルゲンの中心街へジープを走らせながら、引き吊ったようになる首の筋肉を揉みほぐす。疲れきっているらしく、ぐったりしているコーティを背負って約二キロを歩き抜いたわけだが、そろそろ暑熱のシーズンに入りかけている共和国首都でやるには、いささか重労働に過ぎたようだった。

「鍛えてないんだね、テリー」

コーティに遠慮なく評されて、いささかならず傷ついたものだった。

そのコーティは、ジープの後部座席でシユラーフザックにくるまつている。連邦空軍制式の平時糧食の缶詰をそっくり平らげ、紅茶を二杯おかわりすると、そのままこん、と寝入ってしまったのだ。夜通しかけて、レイヴェルゲンから逃げてきたと言う言葉に嘘はなさそうだった。

シェーネベルグ・エリアを出たところでくわした検問は、外交官IDにものを言わせて切り抜けた。

ラジオをつけると、興奮したアナウンサーの声がスピーカを震わせる。ピセンテ・フェレラ首相とその側近が、テロリストの爆

弾によって爆殺されたことを告げ、“共和国の得た最高の政治家”であるフェレラの遭難を悼む内容だった。学者肌のリヴァーズには、連邦と共和国の間に繰り広げられるであろう陰惨な政治力学がピンとこない。

「どうなるのかな、これから？」

ラジオは続けた。

“犯人の一人、デュラン・バードフェザーは、首都某所のアジトに立ち回ったところを逮捕されましたが、犯人一味のひとりであり、バードフェザーの長女コーティリアは、警官隊の懸命の追跡をかわして逃走しました。現在、首都管区警察本部の総力を挙げて、コーティリア・バードフェザーの行方を追っておりますが、まだ検挙するには至っておりません。”

なお、今回のテロ事件について、共和国宇宙軍参謀本部総長デスタリヴァ・ドロク元帥は次のような談話を発表しております。フェレラ首相は、高潔にして識見に富み、シエルメス連邦との緊張が急を告げる昨今、共和国に不可欠の人材だった。かけがえのない人物を、共和国から奪い去った暴力を、我々は、決して許すことができない。犯人のデュラン・バードフェザーは、以前、参謀本部付きの諜報員として連邦母星へ赴いていることが、参謀本部の調査によって判明した。バードフェザーが、今回のような不逞を企むに至ったきっかけは、この連邦母星滞在にあったのではないかと考えている。”

シエルメス連邦とル・ラント共和国を震撼させた“バードフェザー事件”の、これが顛末だった。

「なに、フェレラ首相が暗殺された？ 爆弾テロ？ ドレド人組織のテロかも知れないだつて？」

「ナキヤソ宇宙要塞。共和国首都でのテロを知ったマールクは、読み差しの文学全集を足の上に取り落としした。顔をしかめてつま先を振る司令長官の姿をさりげなく無視して、ネイス・ミュツケルは、参謀本部発表の“背後関係”を掲載するファクシミリ・ペーパーを差しだした。

「デュラン・バードフェザーはドレド出身の妻マユ・バードフェザーを、ドレド空襲で失っている。更には、戦後の兵員削減の際に、不本意な形で軍を退かなければならなかった。以来、彼は自己の周囲の環境すべてに不満を抱き、敵愾心を培い続けたことは想像に難くない。偉大な共和国社会にあつて、ただ一人疎外されていると感じ続けた結果、歪められた心理のもとに、デュラン・バードフェザーは、共和国元首を暗殺することで、時代を先取りした英雄として、歴史に名をとどめようという誤れる妄想に陥つたのである。そしてまた、彼のこの妄想を助長した存在を抜きにしては、今回の惨劇の説明を完全に尽くしたことはないのだからである。彼、デュラン・バードフェザーをして、今回の暴挙へ踏み切らせしめたきっかけが、連邦母星滞在中に与えられたことは、疑問の余地のない事実である。参謀本部第五部局の調査によれば、連邦母星滞在中のバードフェザーは、情報収集を名目に、連邦空軍の将校と頻りに会つていた形跡がある。」

「ネイ、これは……」

「ええ」

「ミュツケルは翠色の瞳を危惧にかけられた。シエルメスが開戦謀略を仕掛けてきた……そういう筋書になつ

ているのでしよう。デュラン・バードフェザーですか、その士官を連邦母星へ送つたのも、参謀本部の差し金ではないでしょうか」

「やな連中だね、まったく」

「軍人としては比類のない天才であるマールクだが、参謀本部のもつとも得意とする情報工作にまでは気が回らないのが普通だった。情報の重要さを知らないのではない。むしろ、戦場での情報の重要さを、マールクほどに知り尽くしている戦略家はいなかった。集めた情報を取捨し、敵情に関する正確な見通しをつけることで、彼は奇跡のように、勝利の女神からの祝福を独占することができたのだから。」

「しかし、参謀本部の活動は、情報を収集するのではなく、目的にあつように情報と状況を作り出し、偽の情報を流して他を誘導しようとする、いわゆる謀略工作である。言ってみれば卑劣な活動であり、マールクやミュツケルのメンタリテイには受け入れがたいものだ。だからこそ、マールクにしても、ミュツケルにしても、参謀本部によるフェレラ首相暗殺の可能性には思い当たりながら、まさか、と思ひ続けていたのである。」

「ネイ……」

「文学全集を拾い上げるマールクの表情は、打つて変わつて強ばりを増している。“ドライバオム回廊宙域会戦”を前にしたマールクが同じような表情を浮かべていたのを、ミュツケルは遠雷が轟くような戦慄とともに思い出している。」

「これは本当に戦争になるかも知れないよ」

「閣下……」

「もつ少し、事態を甘く見ていたんだ。まさか、本気で連邦に手を出すような無謀はするまいとね。そんな馬鹿をやれば。共和国

はおしまいだ。勝ってはならない戦争に勝ってしまったってことが、ここまで危険なことだとは思ってみなかったよ、実際」

フェレラ首相を排除してしまえば、連邦との開戦を回避しようとする政治勢力は、事実上、存在しなくなるのだ。

「謀略とは言っても、これは……」

「しかしね……」

どうしても戦争をしたい、という強固な意志が共和国を実質的に動かしているレベルに存在するらしい。

「誰でしょう？」

「いわゆる政産軍複合体というやつだろうね。参謀本部は“聖戦の大義”とやらに酔っているような顔をしているし、実際に酔っているんだらうけれど、彼らを動かしている連中は醒めているのかも知れないね」

「やはり、対連邦空軍の作戦研究を行わなければならないのでしようね、閣下」

「共和国はその気になってしまった。残念ながらね。あとは連邦しだいだ。カードはもう、連邦の手に移ってしまったんだ。もし、連邦も戦争をしたい、と思っていたとしたら……これはもう個人の手に残ることになるねえ」

「連邦は、今のところ、戦争に走る意図はないように見えますが」「さあ、どうだろうね」

マールクは曖昧に微笑む。ドロクは参謀本部の長だが、たとえば彼を暗殺したところで、戦争を起こしたいとする得体の知れない力は一向に勢いを減じないのではないだろうか。

「不思議だねえ。暗殺をする側は、幾らでも代わりがいるのに、される側は往々にして掛け替えがないんだ。フェレラ首相は、我々

にとつては最大の切り札の一つだったんだよ。その切り札を奪われてしまった。いい線までは攻め込んだ。敵陣一〇ヤードだ。しかし、肝心の逆転タツチダウンパスをインタセプトされてしまった。残り五分。こうなったら、少なくとも負けない作戦を考えざるを得ないんだ」

「やはり、開戦奇襲ですか？」

「それは手だけれど……むずかしいね。連邦と戦争を始めてしまったら、共和国の勝利はない。何とか局地戦に抑えて、破綻しないうちに痛み分けということにできないとね。悪いが、きみの姉上にはまた迷惑をかけることになりそうだよ」

「姉には、まだ閣下の要請に十分に応えられるほどの権限がありません。だからこそ、テロを免れているのでしようが」

アリシアは悲しむだろう。ようやく戦いが終わり、新しいフロンティアが得られる寸前までいっていたというのに……誤った方向に歴史を歩み込ませるにはたった一発の銃弾でよく、そしていったん誤った方向に踏み出してしまった歴史を修正するには、数百万の血が流れなければならぬ。

マールクは、もっとも信頼する友人から視線を離れた。「ヒースクリフとベイを呼んでくれないか」